血と剣の異世界譚

青天

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
血と剣の異世界譚

【Ｎコード】
Ｎ４１８８Ｋ

【作者名】
青天

【あらすじ】
俺はある日突然、異世界に召喚された。
だがしかし始まったのは英雄譚ではなく、殺し合い。
俺は赦さない。全ての元凶であるアルディエロ教をっ！！
俺たちをこんな運命に誘った神もっ！
俺たちにこんな仕打ちをした人間共もっ！！
俺たちを捉えて離さないこの世界もっ！！！
俺は絶対に赦さない！！！

プロローグ（前書き）

どうも青天です。
ごめんなさい。
まだ他の作品書きかけどころか始まりのちょっとしか書いていないのに早くも違う小説書いてしまいました。
思いつきで書きはじめた、ダメ小説ですが楽しんで頂けたら幸いです。

プロローグ

赤、朱、紅。
あたり一面が赤で埋め尽くされていた。
まるで血の海のように、いや実際にそこは血の海だった。
何十という屍が横たわり、あたりを地に染めている。
死した彼らの顔に浮かぶ、絶望、怒り、苦しみ、恐怖、憤怒。
大きく目を見開き絶叫に口を裂き顔を歪め死んでいる。
詰襟の学生服を着た少年、エプロンを着た主婦、サラリーマン、殺し合いなどとは無縁といったような人々。
彼らはまるで殺しあっていたかの様に手に剣を持って死んでいる。
その血の海の中、屍の頂上にただひとりたたずむ少年、返り血を浴び、手には血濡れの大剣、幾多の血を浴び紅く染まったその刀身は刃こぼれ一つなくギラギラと妖しく輝いている。
黒髪黒眼のその少年は屍の山の上で狂ったように嗤う。

「クックックックックク、フハハハハハハハハハハハハハハ赦さない。許さない。ユルサナイ。ゆるさないっ！！！俺たちをこんな運命に誘った神をっ！俺たちにこんな仕打ちをした人間共もっ！！俺たちを捉えて離さないこの世界もっ！！！絶対に赦すものかっ！！！
地の果てまでも追い続けいつか必ずこの手で殺してやるっ！！！殺して、殺して、殺して、殺して、殺して、殺して、殺して、殺して、殺して、殺して、殺して、殺して、
コロシテ、コロシテ、コロシテ、コロシテ、コロシテ、コロシテ、コロシテ、コロシテ、コロシテ、
ころして、ころして、ころして、ころして、ころして、ころして、ころして、ころして、ころしてやるっ！！！！
そして俺達が味わった絶望を、恐怖を、苦しみを奴らにも味あわせ

てやるっ！！！」

プロローグ（後書き）

前書でも言いましたがごめんなさい。
つい書いてしまいました。
もう一つの方も必ず近いうちに更新します。
見捨てないでください。
感想とかください。

第一話　キリヤ・クロミヤ

「はぁ、はぁ、はぁ。夢か……」

そう言って俺は木の木陰から立ち上がる。森で野宿をしていたのだ。
俺は、黒宮　霧夜。いやこの世界ではキリヤ・クロミヤの方が正しいか。
この世界では珍しい、黒髪に黒眼である。
１８０?をこえる長身で一見すると細身だが身体はしっかりと鍛えており、筋肉はしっかりとついていて背中には１６０?を超える長さの大剣を背負っている。
黒い革製の薄めの防具の上に黒いロングコート、その上に黒い布を羽織っている。全身黒ずくめといった風貌だ。

今からおよそ5年前、たしか１５歳のころだったか俺たちは地球からこの世界、グランデスに召喚された。
異世界召喚といってもよく小説にある、人気者の美少年と日陰者の少年などといった組み合わせではなく、爺さんから子供まで無差別に何十人も召喚されていた。
そこにいたのも美しい姫などではなく、この世界の唯一信仰であるアルディエロ教の高位神官だった。白い仮面に白に金の装飾がなされた衣を纏った彼らは、神の名のもとに真の救世主を定めるためと言い俺たちに殺し合いを強要した。
最初は拒否していた俺たちだったが生き残った者だけを元の世界に帰してやる、などという甘い言葉に一人が誑かされた。
否応なく、身を守るためには殺し合うしかなくなった。
初対面の少女に斬りつけられた。
一緒に召喚された地球での友人も俺に剣を向けてきた。

両親は寝ているすきに俺の首を絞めていた。
周囲にいるすべての人間が敵だった。
まるで生きながらにして地獄に叩き堕とされたかのようだった。
気づいた時には俺は屍の頂上に俺はいた。
神官の一人が俺のもとに歩み寄り仮面をとった。

「貴方様がこれより我らが救世主です。さぁ神の代行者として我らと共に異教徒共と戦いましょう。」

男は笑っていた。

「なぜ、こんな事を…」

「なぜ？まさか救世主様なぜ殺し合わせたのかなどとは言わないですよね。
所詮彼らは救世主のなりそこない。蛆虫にも劣る存在です。救世主たる貴方が気にかける必要はありません」

男は笑っていた。
笑いながらさも当然というように死者を足で蹴りあげた。
男の首が飛んだ。
俺が斬り飛ばした。
赦せなかった。人の尊厳を踏みにじり俺達に殺しを強要させた奴らが、笑って死者を冒涜する奴らが、この白い衣の神官たちが。
俺はその神官どもに斬りかかっていったがその場にいた神官のほとんどが白い翼を生やした人ならざる物になり、殺せたのはたったの一体のみだった。
その後俺は奴らを皆殺しにするために旅に出たのだった。

「まだだ、まだ足りない奴らを皆殺しにするにはもっと力が必要だ」
道のない森の中をただ一人歩いて行く、当然この世界には魔物と呼ばれる存在がいる。
森の中人間がたった一人で歩いていようものなら格好の餌である
ウオォォォン
今、俺の目の前にいるのは狼というにはかなり大きな灰色の獣である。
グレイウルフと呼ばれる中級の魔物である。
グレイウルフは魔法を使わず喰らいついてくるのみなので低級に初心者の冒険者でもうまくやれば一体くらいなら何とか倒せる。
しかしこいつらは7～10頭ほどの群れで行動する習性があり、初心者では太刀打ちできない。
殺気を放ちながら背中に背負った身の丈ほどもある大剣を抜き放つ。
剣身が血に赤黒く染まりギラギラと鈍い光を放っている。魔剣の類である。
同時に剣から禍々しい魔力が辺りに噴出する。
魔物たちは恐怖に駆られたのか連携も忘れ十頭すべてが同時に跳びかかってきた。
筋骨隆々の歴戦士の戦士でも両手で持ち上げられるかというほど巨大な大剣をとてもそんな力のあるとは思えない片手で軽々と振り回し一瞬のうちに十頭ものグレイウルフを真っ二つに斬り伏せる。

「ちっ、雑魚が。手間取らせやがって」

基本的に魔物という存在は怨念や恨み、憎悪といった負の感情が何かに宿ったり、邪悪な魔力に汚染され魔物となる。中には強大な魔力を生まれつき身に宿す存在もいるが、一般的な魔物はその身に宿した怨念や邪悪な魔力の塊なのでとてもじゃないが食べられやしな

い。
斬るだけ無駄ということだ。

「ちっ、そろそろ食いもんもねえし、人里に下りるか」

この世界には大よそ5つの大陸が存在する。まずはじめに、今俺がいるクレイアン大陸。世界で最も力の強い大陸統一国家デルクエロ国の北西に位置する。次に南西に位置するアルリアン大陸。北東に位置するガンデルクル大陸。最後に南東に位置するラーディス大陸である。

俺は森を抜け街へと出る。ある程度は食料も確保しなければならないからだ。
俺が到着し町は、クレイアン大陸の最南端にある港町である。
港街というだけあって中々活気のある街である。
しかしなぜか今現在歩いている人が子供一人いない。
とりあえず一晩の宿と市場を探すために歩いていると広場のような所に人だかりができていた。
いったい何なのか気になり広場の方に歩いて行く。

「おい、一体何をやっているんだ？　」

とりあえず一番近くにいたおっさんに声をかける。
俺の方を見ると背中の剣を見て目を見張っていたがすぐに自分に害をなす存在でないと分かると饒舌に話し出す。

「いや～何でもこれから異教徒の処刑をやるんだとよ。貿易船に密航してきたらしくてね、捕らえようとした騎士をすでに二人も怪我させたらしいんだよ。
これだから異教徒の魔人どもは恐ろしい、さっさとこの世から全員

消え失せちまえばいいのに。」

アルディエロ教。デルクエロ大陸を発祥の地とするこの宗教は今や一部の国や地域を除いてほとんどの地に普及している。

こんなことが赦されて良いものかっ！

捕らえようとした騎士を怪我させた？当然だ。生きているものならば身を守ろうとする筈だろうがっ！

異教徒の魔人だとっ？みな同じ人だろうがっ！！

この世から消え失せちまえばいいだとっ？ふざけるなっ！！！

何が神の教えだ、何が聖なる行いだ！！？？偽りの神に縋りつき自ら考えようともしない愚者どもがっ！！！！

「これより異教徒の公開処刑を始める」

手足を鎖で縛られその鎖を引っ張られ引きずられるように紅い髪の女が処刑台に上らさせられる。

歳は１７，８といったところか、よほど辛い処遇を受けたのか窶れた顔をしており、衣服は小汚い布きれ一枚である。

もう生きる希望を捨てたのか瞳に生気はなく暗く淀んでいた。

「この者は唯一絶対のアルディエロ様に仇なす異教の徒であり、我ら人間に害をなす異形の魔人である。

加えて、我らが誉あり騎士二名に極めて重篤な障害行為を行った。

それにつき先ず異形の烙印の公開見聞をとり行う」

執行者はそういうと少女の纏う布きれを引きはがそうとする。

やつらはこの少女を公衆の面前で晒しものにした挙句、殺そうというのである。

生を諦めた少女もこれには抵抗し声を上げる。

「やめてっ」

それにたいして周囲の野次馬達は「さっさとやれー」や「異教徒は黙れっ」などと口ぐちに叫んでいる
俺には、此処に集まる人間共が魔物なんかよりも恐ろしく思えた。
宗教という名の妄執に取りつかれ自らと外見の変わらない少女を口ぐちに殺せと叫ぶ、まるで悪魔の集団だ。
俺はあの少女を助けなければと思った。
そして何よりこの腐った人間どもを、騎士共どもを、アルディエロ教を殺してやりたい。
赦せるものか、赦せるわけがない。何の罪もない人間が殺される何てこと赦していいはずがない。
憎い、赦せない、殺してやりたい。
この世界の人間を、この世界の神を、そしてこの世界そのものを殺したい。

ついに少女の纏う布切れは引きはがされ、人々の目に晒される。

「嫌っ、やめてっ」

次の瞬間俺は地面を強く蹴り、野次馬達の頭上を飛び越え、処刑台の上に着地する。
そして自らの纏う黒い布を少女に頭から被せると、背に背負った大剣を抜きそのまま死刑執行人を頭から一刀両断にする。
処刑台に突き刺さった大剣を引き抜くと、次に剣を横凪ぎにし今にも斬りかかろうとしていた騎士たちを4，5人まとめて胴体を切り裂く。

野次馬達は一気にパニックに陥る。

「また異教徒だ。騎士団は何をやっているんだ。殺せ！！　」

「アルディエロ様、どうか救いの御手を」

醜い、汚らわしい、憎い、赦せない、殺してやりたい。
俺は元々日本人だ。それゆえに盲信的な信仰とはどういうものかは分らない。
だがこいつらを見てこれだけは言える。アルディエロ教は腐っている。醜い、汚らわしい。あってはならない、赦してはならない。

「ふざけるなっ！！
貴様らがやっているのはただの人殺しだっ！！
神の名をかたり自らの醜い本性を隠す。汚らわしい悪魔どもめ。
なにがアルディエロだっ！！！！ふざけるなっ！！
アルディエロとアルディエロ教、そしてその信者はすべて俺の敵だ！！
俺は絶対に許さないっ！！」

処刑台の上で俺はそう叫ぶと、剣と俺の持つ膨大な魔力を斬撃に乗せ地面に向け放つ。
それにより、魔力の奔流と土煙りが起き視界は完全にゼロとなる。
そのすきに俺は少女を抱えこの場を離脱した。

第一話　キリヤ・クロミヤ（後書き）

とりあえず第一話。
衝動的にかいたのでこの先を全く考えていません。
誰かアイディアをっ・・・・・
ごめんなさい。ちゃんとそのうち更新します。
感想とかアドバイスとかそういうのください。

第二話　アスカ

私は故郷を追われなんとか船に忍び込み、この地に来た。
けれどまたここでも安息は無かった、陸に着いた途端密航していたのがバレ、騎士団に追われた。
私を守ろうと故郷からついてきた小竜のフランが騎士に威嚇で火を噴き、騎士の顔に軽い火傷を作ってしまった。
それによって、異教徒だと言われ騎士団に捕まった。確かに私はアルディエロ教を信じていない異教徒かもしれない、けれど私がしたことと言えば船にこっそり乗り込んだことと騎士の顔に豆粒程度の火傷を作った程度だ。

騎士団に捕まった私は手と足を鎖で縛られ、フランとも引き離され薄汚い牢屋に入れられた。
着ていた服も脱がされ、食事はウジ虫が湧いたようなパンだけ、とても食べる気はおこらなかった。
毎日、看守達により「異教徒は死ね」などと言われ殴る蹴るなどの暴行。
周囲から聞こえるのは他の囚人の狂ったような叫び声。
次第に心身ともに疲れはてていった。
次第に生きる希望は失われていった、もう死んだ方がマシだと思うようになっていった。
公開処刑を行うと看守から聞かされた時も恐怖などなくようやく死ねるという思いだった。
処刑台に引きずるように上らされ、人々の前にひきだされても何も感じない。
もう私は全てに絶望していた。
けれど執行人は、私が唯一身に纏っていた布を引きはがし始めた。
生きることも諦めた私だったけれど人として女として、大勢の人の

前で裸にされ晒しものにされた挙句無残に殺されるのは嫌だった。
何とか抵抗しようとしたが、長い間牢屋でほとんど飲まず食わずだった私は声を上げるのがやっとだった。

「やめてっ」

けれどそんな言葉を彼らが聞き入れるはずがなく、抵抗も空しく、大勢の人々の前で裸にされる。
その瞬間日の光が陰り、上を見上げると黒衣の男が降りてきた。
次の瞬間には頭から黒い布をかぶせられる。
手足を縛られているうえに突然のことで身動き一つできなかった私だが周囲の音で状況を把握できた。
どうやら黒衣の男は騎士団相手に戦っているようだった。
この男が誰でどういう男なのかなどまるで分らないが、身体に布を被せてくれたり、騎士団と闘っていることなどから、私を助けようとしていることだけは分った。

「ふざけるなっ！！
貴様らがやっているのはただの人殺しだっ！！
神の名をかたり自らの醜い本性を隠す。汚らわしい悪魔どもめ。
なにがアルディエロだっ！！！！ふざけるなっ！！
アルディエロとアルディエロ教、そしてその信者はすべて俺の敵だ！！
俺は絶対に許さないっ！！　」

突如私の耳に響き渡る、大喝。脳を直接揺すぶられるような音量で叫ばれる、おそらくはあの黒衣の男の生の感情、血の滲むような想いの断片。
途端巨大な魔力の奔流が吹き荒れ私の意識は闇に落ちていく。

気がつくと私は木を背にして寝かされていた。
すでに辺りは暗くなり、見回すとそこは森のなかのようだった。
すぐそばには火の番をしている、あの黒衣の男が座っていた。

「気がついたか」
処刑台では一瞬のことで顔までしっかり見ることができなかったがこうして見てみると、精悍な顔つきでなかなか整っていてかっこいいという部類に入るだろう。
黒髪に黒眼という珍しい色をしているが彼によく似合っている。
また処刑台での最後の叫び声からは想像できないほど落ち着いた雰囲気を纏っている。
欠点があるとすれば常に眉間に皺を寄せており、その黒衣と大剣も相まってかなり恐ろしく見えることだろう。

「あ、あの貴方は？　」

「俺か、俺はキリヤだ、キリヤ・クロミヤ。そういうお前は？　」
そう言うと彼、キリヤは私の方をまっすぐ見て訪ねる。
私はその鋭く、深い黒の瞳と目が合うと、すべてを見透かされるような錯覚を覚えてしまった。

「わ、私はアスカよ」

「それだけか？家名はないのか？　」
キリヤは相変わらず私の方をしかも目を見て会話を続ける。
どうやら彼は基本的に、相手の目を見て話すようだ。
生まれてこの方まともに人と関わってきた事のない私にとっては新鮮であり照れくさかった。

「私、生まれてすぐ両親に捨てられて孤児院で育ったから名前は無

いんだ。
　このアスカって名前も自分でつけた名だし。」
こんなこと、会ったばかりの人間に話すことじゃない、今までだって誰にも話したことはなかった。
でもキリヤには話してしまった、地獄から解放されたせいか、まだ生きている喜びからか、それとも全く別の感情からか。

　ぐ〜〜〜
私のお腹の音だった。恥ずかしくて一気に顔が赤くなるのが自分でもわかる。

「あ、いやこれは、別にお腹が空いたとかじゃなくって」
慌てて、言い訳したものの説得力はなく、実際かなり長い間食事をしておらず、下手をすれば空腹で倒れてもおかしくないことに自分でも気づく。
ふと見ると、いつも眉に皺をよせしかめっ面のようにしていたキリヤの表情が僅かに緩んでいるのに気がつく。
一瞬だけだがキリヤがすごく穏やかに笑ったかのように見えた。

「ちょうど晩飯の材料を狩ってきたところだ。あとは焼いて食うだけだ」

そう言うとキリヤは視線を後ろに向ける。そこには体長二メートルはあろうかという巨大な猪の死体が転がっていた。
魔物ではないようだがそう簡単に狩れるものではないことは見て分かる。
よく見ると切り傷などの傷がない、キリヤは見るからし剣士であるため一体どのようにして倒したのかがわからない。魔法でも使ったのだろうか。

「えっとこれ、一体どうやって？　」

「素手だ」

キリヤは私が言葉もなく驚いている間もまるでどうということはないとでもいうように、
黙々と作業をし猪を火にかける。

「出来たぞ」

キリヤは十分くらいして焼けた肉のきれを私に差し出す。かなり久しぶりの食事に私は口の周りが汚れるのも気にせずかぶりつく。
キリヤ自身も結構お腹が減っていたのか、勢いよく食べていく。すると何かを思い出したかのように立ち上がると、袋を取り出す。

「おっとそう言えばこいつもいたな。竜みたいだがとりあえず焼いとくか。」
そういうとキリヤは袋から暴れる小竜をだす。
どこかで見たことがあるような気がする。・・・・・ていうかあれフランじゃない！！

「ち、ちょっとまった～！！
　それ、私の友達。フランっていうの、だから食べるのはやめてっ！　」

「ちっ」
キリヤは一瞬真顔で舌打ちをする。どうやら本気で食べようとしていたみたいだ。
私はそんなキリヤの腕からフランを掴みとる。

フランは体を震わせ私に抱きついてくる。若干涙目になっている。よほど怖かったのだろう。

「ごめんね、フラン。
ちょっとキリヤ、なんてことするのよ。こんなに怯えてるじゃない」

命の恩人とはいえ親友が酷い目にあったのだ。抗議せずにはいられない。
だいたいどこの世界に小竜とはいえ竜種を食べようなんて考える奴がいるのだろう。

「そいつは突然俺に体当たりして首筋に噛みついたんだ。焼いて何が悪い。
だいたい竜と友達だと？まさかそいつと話せるなんて言うわけないよな」

キリヤのその言葉に私は一瞬固まってしまった。だがすぐに気を取り直し言葉を発する。

「えっ？話せるわよ。よく分ったわね」

私がそう言うとキリヤは驚いたように目を見開き、私の目をみる。
実際何でもないことのように言ってみたが今までこの事を打ち明けた人間の反応はたいてい信じないか、気味悪がるか、異教徒だと騒ぎだすかだった。
そのため私は不安に駆られる、この人も私を否定するのではないかと。また一人ぼっちになってしまうんじゃあないかと。
キリヤは私を数秒間見つめ続けると唐突に視線を外し、考え事をするように目を閉じ、ぶつぶつと何かを呟く。

「竜と話せるだと？……そんなわけ……だが……もしかしたら……そうでなくとも……」

またも突然視線をこちらに向けると信じられない事を口にする。

「おい、アスカ。お前、俺の旅に着いてこないか？」

初めてだった、私の秘密を知っても拒絶しない人間はキリヤが始めただった。

知らず知らずのうちに目から涙が流れる。

「お、おい何で泣くんだ？」

キリヤのしかめっ面が焦ったようになるのが見えて、なんだか可笑しくてとても安心して、気付くとキリヤの胸で泣いていた。

第二話　アスカ（後書き）

あんまり待たせるのもどうかと思いとりあえず二話更新。
もっとダークなお話にしようかなと思っていたんですが案外普通になりました。
あとで大幅に編集する可能性もあります。
感想とかください。

第三話　異端審問官（前書き）

一応戦闘シーン満載です。
しかし自分文才では・・・・・・・
あんまり期待しないでください。

第三話　異端審問官

　アスカは泣き疲れたのかひとしきり泣くと、スヤスヤと寝息を立てて寝入ってしまった。
綺麗な紅い髪と、整った顔立ちから美少女であることが分かるが、今はすっかり痩せ細り、身体じゅうに痣がある。牢屋でよほど酷い目にあったのだろう。

「さてと、おいフラン。お前も竜種の端くれならその女しっかり守れよ」

先ほどから警戒し周囲に軽い熱気を放っているフランに声をかけ、素早く周囲に視線を走らせる。

1、2、3……ざっと15といったところか。

「誰か知らんがこそこそしてないで、さっさと出てきたらどうだ？」

周囲に殺気を振りまきながら背に負った大剣に手を添え、虚空に向かって言い放つ。
すると周囲を囲むように四方八方から物音がし、黒い軽装の鎧の騎士が十数人木の影などから現れる。
唯一騎士の装備をせず、黒い神官の衣を纏った男が、俺の前まで歩み寄り、大げさに一礼をする。

「これはこれは、気付かれておられましたカ。とんだ失礼をお許しください。
　ワタクシ決して怪しい者ではございません。異端審問官のベリエ・

ルイーデルと申します。
以後お見知り置きを。」

異様に細い体つき、暗く落ち窪んだ眼に、異常なまでに青白い肌。
いちいち大げさな胡散臭い動作。
それらがまるで人ではないような、あえて言うなら、イカレタ道化師（ピエロ）のような印象をあたえる。
何よりこいつの身分が気に入らない。異端審問官、つまりアルディエロ教の追っ手である。

「それで、異端審問官のベリエさんがただのしがない旅人の俺らに何の用で？　」

この異端審問官、何を企んでやがる？異端審問官なら有無を言わさず俺らを殺せばいい筈だ。
なぜ態々姿を見せ、おまけに名など名乗るんだ？

「何をおっしゃるのですか、黒衣の剣士サン。ワタクシ、あの港町の処刑場にいたのですよ。
そこで偶然アナタを見ましてね。アナタの武に感動いたしましタ。
是非、ワタクシの仲間、いえ協力者にと思いまして。
ワタクシの仲間になれば上に掛け合って、アナタを無罪放免にして差し上げマスよ。
どうです？悪い話ではないでショウ？　」

「何故、俺を協力者に？
　お前はもうすでに十分な武力を持っているだろう？　」

そう言って俺は周囲を囲む黒騎士を見回す。

「言ったでショウ？ワタクシは、アナタの武に感動したのですよ。
　それにワタクシ、ただの異端審問官で終わるつもりはございませン。ゆくゆくは全ての異端審問官の頂点、最高異端審問官となるのデス。
さぁワタクシの協力者になりなさい。アナタも一生逃げ続ける人生なんて御免でショウ？ワタクシにつけば一生安泰なのですよ」

相変わらずの大げさな身振り手振り、だが先ほどと違うのは自分の野望を語るにつれさらに身振りが大きくなり、暗かった瞳には狂気の光が宿っている。
自らの野望に酔っているのか眼は血走り、口は三日月のように釣り上げられ涎が垂れている。狂っているとしか言いようがない。

「生憎、俺は自分でこの道を選んだ。あと戻りするつもりはない。
　それに俺はお前らアルディエロ教が大嫌いだ」

「交渉決裂ですね。お前たちヤレ」

ベリエがそう言うと、周囲を囲んでいた１４人の黒騎士達が一斉に斬りかかってくる。
俺は背中から大剣を抜きそのまま振り下ろし、騎士の一人を頭から地面まで一気に斬り下す。
地面にまで叩きつけた大剣を今度は斜めに斬りあげるようにして三人の騎士を纏めて斬り殺す。
両手で持てるかどうかという重量の大剣を俺は片手で軽々と振り回し、ある者は首、ある者は胴をという風に斬り殺していく。
本来大剣というのは巨大で重いため一撃は重いかわりに隙が多くまた懐に潜りこまれるとどうしようもないのだが、俺の剣速は常人の動体視力では捉えきれない神速の領域に達している。
速さと重さそして俺の筋力の加わった俺の斬撃はさながら竜の一撃

の如く威力で一太刀で間合いにいる相手は真っ二つとなる。
１４人いた騎士たちもほんの数秒でただの肉塊となり果てる。

「くっ！」

突如背後に気配を感じ咄嗟に振り替えり迫ってくる斬撃をうけとめる。
剣と剣がぶつかり甲高い金属音が響く。
この戦いで、剣を打ち合わせる必要などなく全て一撃で敵を葬っていた俺が初めて敵の剣を躱しきれず受け止めたのだ。
この場にいる敵は全て斬り殺したはずである。
唯一斬っていないベリエは奇襲などできない距離にいた。
そして俺の目の前には首のない先ほどの騎士がいた。
周囲に倒れている騎士たちも次々と起き上がっている。
腰から下のないものは上半身だけで這うようにこちらに迫ってきており、そのほかの肉片もとうに命は失われたはずなのに動き回っているのだ。
次々と振るわれる剣戟を躱し避けきれないものは剣で受け止める。
胴を真っ二つにされた肉片は俺に纏りついて来るだけで攻撃はできないが、首を刎ねたりした者の斬撃は明らかに生前よりも上回っている。
剣速、力、技術どれをとっても先ほどまでとは比べ物にならない。

まともに攻撃できるのは三体だが他の肉片が動きを邪魔し思うように立ちまわれない。
それでも俺は一度に襲い来る三つの斬撃を完璧な見切りで躱し、大剣を巧みに扱い防ぐ。
本来の能力を超えた動きに死体の筋肉線維がブチブチと音を立てて切れていくがまるで関係ないかのように剣をふるってくる。

「ちっ、いい加減しつこいぞっ！！　」

そう言うと俺は一気に気を放ち肉片共を吹き飛ばす。

「これでも喰らえっ！！　」

俺は大剣に魔力を込めると逆手に持ち地面に突き刺す。

すると突き刺した地点からまるで波紋が広がるように一気に地面を魔力の奔流が迸り、肉片を粉みじんにする。

突如、地の底から響くような叫び声あ響き渡る。

粉々になった肉片から突如半透明の苦痛に歪んだ人の顔のようなものが飛び出していた。それらはしばらく叫びながら周囲を飛び交っていたが、ベリエが俺の方に腕を向けると、一斉に襲い掛かってきた。

「黒衣の剣士よ、生きたままワタクシの奴隷となるがイイ！！　」

ベリエはもう完全に本省を現し、完全に狂気をむき出しにし嗤っている。

だが次の瞬間彼の顔から嗤いは消え去り、眼は驚愕に見開かれていた。

俺の剣には半透明の人の顔が１４、すべて突き刺さり次々と黒い炎に包まれ消えていく。

「ば、馬鹿な。なぜ死霊を剣で斬れる？　」

「やはり死霊使い（ネクロマンサー）か、この剣は仮にも魔剣、死霊ごとき斬れないわけが無いだろう」

ネクロマンシー、死霊を操る禁忌とされる呪術。人の魂の尊厳を傷

つけ、死者を冒涜する最も忌むべき呪術。
おそらくベリエは死体となった騎士に戦士の霊を憑依させたのだろう。
安らかに眠る死霊を無理やり戦いに引きずりだし、騎士たちの死を利用した赦されざる行いである。

「貴様、自分がどれだけ非道な行いをしているか分かっているのか？」

「非道？何を訳の分らぬことを、ワタクシが使役しているのは異教徒の死霊。そうワタクシこそ神、アルディエロの名の下異教徒どもに現世と死後両方において罰を与えるモノ。
異教徒には生前も死後も安らかになる権利なんてモノありはしないんですよ」

熱い、血が沸騰しているように、全身が熱い。憎悪が理性を蝕んでいく。
腐ってる、醜い、汚らわしい、憎い、殺してやりたい。
負の感情が俺の中で渦巻き、沸き立ち、煮えたぎっている。
無意識の内に俺は全身からどす黒い魔力を放ちながら、ベリエのもとに突っ込んでいた。

「死霊よ、奴を喰い殺せ」
ベリルは再び２０以上の死霊を呼び出し、向かわせてくる。
しかしその全ては俺の肉に届く前に黒い魔力にはじき飛ばされ、黒い炎を出して燃え上がる。

「クソっ、なぜ死霊の攻撃が届かない！？
えぇい、『死者よ、地に眠りし全ての亡者よ、我に隷属せよ！』」

ベリルは今まで無詠唱で行っていたネクロマンシーを今度はより強い力を込めるため詠唱をして発動する。
突如周囲の土が盛り上がり、人、獣、魔物、ありとあらゆる物がゾンビのように這い出て襲いかかる。
その数は百を超えるほどだ。
しかし俺はそれらの大群に目もくれず大剣の一振りですべてを燃やし全く勢いを殺すことなくベリルに跳びかかる。

しかし肉を切る音は聞こえず、かわりに甲高い金属音、剣の打ち合う音が響く。

俺の一撃はベリルに届かなかった。
ベリルは自らも剣を抜き俺の大剣を止めたのだ。
あろうことかベリルがである。ベリルの腕は一切の筋肉がついていないのではというほど細い。
しかしその骨ばった細腕で剣を握り防いでいた。

「貴様、自分に憑依させたな」

「そうだ、ワタクシの操る最強の死霊サ。ドウダイご自慢の大剣を止められた気分ハ？　」

ベリルはその瞳を狂気に爛々と輝かせ、勝ち誇ったかのように口を三日月に吊り上げる。
その醜い顔が堪らなく俺の癇にさわる。

「死ね」

その瞬間、俺の大剣はベリルの剣ごと真っ二つにした。

第三話　異端審問官（後書き）

だめだ。やはり文才が無い。
だれかアドバイス等ください。今後の参考にしたいです。
感想もくれると嬉しいです。

第四話　キリヤの魔法講座（前書き）

とりあえず先に謝っておきます。御免なさい。

第四話　キリヤの魔法講座

目が覚めるとすでに朝になっていた。
しかし周囲の様子は昨日寝る前とは全く別物になっていた。
そこらじゅうに肉片や骨が落ちており、地面には深く抉るような傷跡が何本も走っいる。さらに昨日までは空が見えないほど生い茂っていた木々は何十本も切り倒されていた。
まるで凶暴な魔物が暴れまわったかのような惨状だ。

「やっと起きたのか」

声のした方を向くと、切り倒された切り株の一つにキリヤが腰かけ欠伸をしていた。
若干眠たそうに見えるのは気のせいだろうか。

「え、えっとこの惨状はいったいどうしたの？　」

私がこの昨日とは打って変わった景色について尋ねると、キリヤはわざとらしく溜息をつき口を開く。

「アルディエロ教の追っ手が来たんだよ。ていうかお前、あの状況で目を覚まさないってよっぽど図太い神経しているんだな。
ここら一帯は死霊の飛び交う戦場だったんだぞ、その戦場のど真ん中で熟睡って……」

そう言うとキリヤは呆れたような視線を送ってくる。

「仕方ないじゃない、疲れて寝ちゃったんだからっ！　」

そう言って自分でも昨晩の事を思い出す。
キリヤに助けられて、巨大な猪食べて、フランが食べられそうになって、キリヤに旅に誘われて、泣いちゃって……
そうだった、あの時私はキリヤに抱きついて泣いてそのまま眠ってしまったんだった。
今思い出すとかなり恥ずかしく、一気に頬が熱をもつ。
昨日と同じようにキリヤはこちらの目を見て話をする、たまらず目を逸らすとキリヤが思い出したように口を開く。

「あぁそうだ、フランにも礼を言っておけよ、死霊どもからお前を守っていたからな」

「ガウ！！」

いつの間に起きたのかフランは私の膝の上にのり胸をはって私を見つめる。
褒めてもらいたいのだろう。

「ありがとう、よく頑張ったね。フラン。で、キリヤは私を守ってくれなかったの？」

「俺に、爆睡してる女を抱えて戦えと？　自分の身ぐらい自分で守れ。魔法でも覚えたらどうだ？　」

自分でもその光景を想像してみるが正直笑えない。
戦闘中に寝ている私、それを抱えて魔物に突っ込んでいくキリヤ。
キリヤはともかく私はおそらく爆睡が永眠に変わるだろう。

「そんなこと言っても魔法習おうと思ったら高い金払って先生雇わなきゃならないし、大体こんな逃亡の旅に着いて来る先生がいると

思う？　」

魔法を習おうとするならば一般的に魔法学院に通うか、専属の教師に来てもらうかが今の時代の主流だ。
しかしどちらも授業料等がとても高いため魔法を学ぶことが出来るのは貴族ぐらいである。
そうやってお金をつぎ込んで学院を卒業すれば一流の魔法使いになれるというわけではない。学院で教えるのは教科書にのっているごく一般的な魔法ぐらいだ。
なぜなら魔法というのは本来戦うために編み出されたもので自分独自の魔法などを他人に教えるということは弱点を教えてまわっているようなものだからである。

「問題ない、俺が教える」

そう言うとキリヤは荷物の中をあさり一冊の分厚い本を投げてよこす。
タイトルには『魔法学基礎』と書かれている。
試しにパラパラとめくってみるが難しすぎて説明なしでは理解できないところが大半だ。

「ち、ちょっと。こんなの私一人で理解できるわけないじゃない」

そう言うとキリヤは僅かにこちらを向く相変わらずの仏頂面だが一瞬いつもよりも嫌そうに歪められる。

「ちっ」

「ちょっと何で舌打ちするの！？　魔法覚えろって言ったのキリヤじゃない」

キリヤの態度に腹が立ち、つい大声をだし責めるのだが肝心のキリヤは全く気にしてないように口を開く。

「少なくとも俺は、あれで基本くらいは覚えた。お前ができんのは才能の問題だ。とはいえ、まぁ一応基本くらいは教えてやるよ。一般的な魔法ってのは精霊の力を借りて発動させる精霊魔法のことだ。

まずこの魔法の発動の仕方だが、重要なのは魔力、イメージ、詠唱だ。

呪文とイメージによって魔方陣を起動させる。まぁ呪文とイメージってのは鍵みたいなものだ。

そしたら次は魔方陣、この魔方陣に魔力を流しその魔力を精霊がうけとる。そうすると魔力を対価として精霊が事象を引き起こすんだ。

それから属性についてだな精霊魔法の属性は火・水・風・地・光・闇の六つある。これは精霊の属性がこの六つだからだ。

これが魔法の基本理論だ、分ったか？」

「えっ、ちょっともう一回お願い」

一遍に言われても分らない。精霊？　魔方陣？　呪文？

なんか頭の中で良く解らない単語がグルグル回っていて混乱する。

「却下

次はとりあえずお前の適正属性を調べるか。確か荷物の中にあったはず。」

そう言うとキリヤはまた荷物の中をあさる。どうやら無駄に詰め込んでいるようで目的のもの以外の物が次から次へと飛び出してくる。

「あった。ほらよ」

キリヤは荷物の中から球体の何かを取り出して投げわたす。
透明な水晶で間違いなく投げたりなど手荒に扱って良い代物ではないことが分かる。

「ち、ちょっといきなり投げないでよ」

「そいつに魔力を流すと最も適性のある属性から順に反応が出る。
ほら、さっさと魔力流せ」

私の至極一般的な反論は完全無視ですか。
おまけにいきなり魔力流せとか言われてもどうやればいいのか分からない。

「魔力流せとか言われてもそんなのできない」

「やろうともせずにできないとか言うな。
ちょっとその水晶に意識して見ればいい。そいつはかなり感度が良いからな。ほんの僅かな魔力でも反応する」

意識するっていうのもどういうことかよく解らないがとりあえず、
水晶を見つめて集中して見る。
すると透明な水晶の中に炎のような赤い光が灯る。
しばらくすると、赤い光は徐々に消え今度は白い光が薄らと輝く。

「属性は火と光か、それなら
『六大精霊の一柱にして力を表す火の精よ　我が意に応え我が力となれ　ファイアボール』」

キリヤがそう詠唱を唱えると上にかざした手に魔方陣が出現し直径一メートル以上の火の玉が激しく燃え盛っていた。

「アスカ、一週間でこれくらいできるようになれ」

そう言うと自ら生み出した炎を握り潰すように拳を閉じ魔法を消滅させる。

ちなみにこの魔法ファイアボールは魔法学基礎によると低級魔法で拳ぐらいの火の球を発生させる物である。

「ち、ちょっとこんなの無理に決まってるじゃない」

「がたがた言ってないでさっさとやれ」

キリヤは私を睨みつけると再び手に火の玉を生み出す。しかも今度は無詠唱でだ。

人を火達磨にするには十分すぎる威力だろう。

「わ、分ったわよやればいいんでしょ。

『六大精霊の一柱にして力を表す火の精よ　我が意に応え我が力となれ　ファイアボール』」

詠唱はきちんと唱えることができたが自分の目の前には火なんて欠片もない、魔方陣こそ出現しているが何故か魔法が発動しない。

「馬鹿。重要なのは魔力、イメージ、詠唱だと言っただろ。イメージが全然できていないうえに、魔方陣に魔力を流してないじゃないか」

そう言うとキリヤは先ほどの魔法書『魔法学基礎』で私の頭を叩く、

しかも角で。
基礎とはいえ仮にも魔法書、かなり分厚い。間違いなく私の頭にはたんこぶができた。

「いっつぅ～、何するのよ！だいたいイメージはともかく魔力をながせって言われてもよくわかんないわよ」

涙目でキリヤを睨みもっと文句を言ってやりたいが、言ったが最後、つぎはあの特大の火の玉で丸焼きにされる。
これ以上文句も言えず、涙目でじっと睨んでいたらキリヤは何かに気づいたように声をだす。

「そうか、アスカはまだ魔力の流れが分らないのか」

一人で納得したように呟くと突然キリヤは私の腕を掴む。
咄嗟のことで心構えがでずドキッとしてしまう。
恥ずかしくてかなり近くにあるキリヤの顔を直視できない。

「これから俺の魔力を少しだけお前に流すから集中してろよ」

突然、身体に何かが流れ込むような感覚に襲われる。
異物が侵入しているような違和感があるがそれよりも大きい暖かさを感じる。
お風呂に浸かっているようなぽかぽかした感覚が腕から順に伝わって体がほぐれていく。
あまりの気持ちよさに目を閉じ感覚にみを任せる。
しかし急に流れ込んでくる魔力の量が一気に増加しビリビリとした電流が身体を迸るような感覚に襲われる。

「んあっ」

先ほどまでの温かい感覚とのギャップのせいか一瞬視界が真っ白になる。
気がつくと目の前にキリヤの顔がありいつもの仏頂面が僅かに心配そうもしている。

「悪い、魔力の調節を失敗した。どこか調子の悪いところはないか」

「うん、大丈夫。じゃあちょっと魔法やってみるね。」

キリヤに至近距離で見つめられる状況に耐えられなくなり誤魔化そうと魔法の練習を提案する。
さっきまでとは違い不思議と今度は成功するような気がする。

「『六大精霊の一柱にして力を表す火の精よ　我が意に応え我が力となれ　ファイアボール』」

私の目の前には拳ぐらいの火の玉がゆらゆらと揺れていた。
その火の明かりは私の心に初めて芽生えた希望のように、そして自分でも分らない新たな気持ちのように暖かかった。

第四話　キリヤの魔法講座（後書き）

作者はもうすぐ春休みが終わるため次の更新はいつになるか分りません。
ですが必ず更新はします。見捨てないで上げてください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4188k/

血と剣の異世界譚

2010年10月11日14時45分発行